

平成18年度「専修学校教育重点支援プラン」成果報告書

事業名	専門学校に適したコンピテンシー教育を実践するためのファカルティ開発の推進		
法人名	学校法人三橋学園		
学校名	船橋情報ビジネス専門学校		
代表者	理事長 鳥居 勝一	担当者 連絡先	鳥居 高之 TEL 047-425-1051

1. 事業の概要

企業が専門学校に求めることの第一は、専門領域の知識・技能の教育であるが、近年の様々な調査結果などによれば、新卒者の採用にあたっては「専門知識・技能」とほぼ同一の水準で、それらを下支えする「基盤能力」についても重視するという傾向が強まっている。

ここでいう「基盤能力」とは、課題発見・解決力や対人関係構築力や主体的な取り組み姿勢といった、特定の専門分野によらない能力である。いわば陳腐化しない「底力」であり、企業の人事マネジメントではコンピテンシーと称されるものである。一部の専門学校や大学では、コンピテンシー教育への取り組みを始動させているが、専門学校教育への要求の高度化に伴い、今後その重要性は増すものと考えられる。

本事業では、産業界におけるこうした状況を鑑み、基盤能力(コンピテンシー)教育を全学的・組織的に実践するためのファカルティ開発(教員研修)に取り組むこととした。それにより、専門学校教育(職業教育)に適したコンピテンシー教育の内容・指導方法を探ると共に、教育研修体系の構築と実施を行った。コンピテンシー教育の実践は専門学校全体にとっての重点課題であるという認識の下、工業・ビジネス分野だけでなく、異分野の多くの専門学校にも導入・活用することができるモデルケース的な取り組みとすることを目指した。

2. 事業の評価に関する項目

① 目的・重点事項の達成状況

本事業では、コンピテンシー教育を目的とした教育プログラムの開発を実施したが、実証講座終了後のアンケートの集計結果などから推察すると、期待以上の成果を得ることができたと考えられる。

学生の論理的思考力の強化を狙いとしたケーススタディ演習の有効性については、受講者全員が、「非常に有効である」と回答し、その理由として、課題解決力、論理的思考力、議論などの重要性を挙げている。さらに、社会人基礎力やコンピテンシーに関する教育の意義についても、全員が「重要だと思う」と回答しており、本研修プログラムの有用性を高く評価していることを示している。

研修プログラムの内容面についても、論理的思考の手法としての三角ロジックの有効性、教育手法としてのケーススタディ、グループ討議の有効性、インターネットを利用した情報収集の有効性を問う質問のいずれにおいても、受講者全員が、「非常に有効である(だと思う)」あるいは「やや有効である(だと思う)」と答えており、研修プログラムの内容が肯定的に評価されていることを確認することができた。

また、質問の理由や自由意見には、「自分で調べ、行動する姿勢を身に付けさせることが大事であり、本ケーススタディはそのために有効であると思う」、「今回の研修は主張する機会が多く、会社に入ってから役立つ」など、他のコンピテンシーを身に付ける上でも役立つという本事業の目的とするコンピテンシーの重要性を認識し評価する意見も寄せられた。

②事業により得られた成果

本事業で開発した、教育プログラムの内容は、指導テーマごとのミニケース演習を基本要素として構成した。指導テーマとは、コンピテンシーモデルを構成する個々のコンピテンシー項目に対応した教育内容・方法である。

演習の中では、各指導テーマの特性に応じた指導素材・題材を提示し、課題解決のためのツール(三角ロジックなどの論理的思考力等の基盤能力を練成する上で有用なツール)の授業での扱い方、講座の進め方などの実践方法等についての掘り下げを図った。

演習の進め方としては、ワークショップやロールプレイング等の研修スタイルを取り入れ、参加型の実施形態とすることによりスキル修得を図った。

また、ひとつひとつのミニケースは内容的に独立性・完結性の高いもの(互いに依存性や順序性を持たないような設計)とした。その狙いとしては、他の専門学校がこの教育プログラムを利用する場合、各ミニケースをモジュールとしておくことにより、各校がその時点で必要とする指導テーマ(ミニケース)のみを選んで実施することもできるような利便性を確保するためである。

③今後の活用

コンピテンシー教育は、まだスタートラインであるが、全学的な組織的課題と位置付け取り組んでいくため、こうした教材の強化に全校の教員自らが問題意識を持って取り組むことが、コンピテンシー教育への関心をより一層深め、様々な教育の局面でのコンピテンシー教育の活用を促進し、教員の指導スキルの向上にも効果的に働くという好循環を生むものと期待している。

④次年度以降における課題・展開

本事業で開発した教育プログラムにはいくつかの課題点が指摘された。当初、1グループの人数は、5～6名を予定していたが、受講者から4名が限度ではないかとの指摘があった。こうした運用面においては、環境条件を少し変えながら研修を重ねることにより、実験的に最適化を図っていく必要があると考えられる。

時間の面でも、インターネットでの情報収集に多くの時間を要し、3コマでは厳しいとの意見があった。今回は、PowerPointでまとめ、発表するという模造紙にまとめるよりもさらに時間を要する要因が加わったようにも思われる。教材を学生に適用する場合は、学生のインターネットの情報収集力やPCのスキルの問題も考えられ、受講者の意見にも見られたような既に収集されたデータを補助的に提供するなどその場の進捗状況に沿った講師の柔軟な対応が望まれると考えられる。

また、三角ロジックを使いこなし、論理的思考法を定着させるには、繰り返すことが必要であるとの意見も多く寄せられた。そのためには、演習の数が必要であるが、演習のフレームワークは、ある程度決まっているので、題材を変えることにより増やしていくことは可能である。

3. 事業の実施に関する項目

①実態調査

教員研修の主要テーマであるコンピテンシーモデルや教授法、教育設計の方法論に関する情報収集を行った。本事業の主旨に鑑みて、指導方法については技術教育だけではなく、さまざまな専門教育で実績のあるものもターゲットとし、コンピテンシー教育に有用な新しい指導アプローチを検討するための参考資料としてまとめた。

更に、高等教育機関等が行っている国内外の教員研修(ファカルティデベロップメント)や企業のインストラクタ研修の実施内容や体系、推進体制等の実態についても調査を行い、組織的な教員研修のあり方や実施体制や推進方法等を検討するための参考資料とした。調査の進め方としては、調査の精度と効率を上げるため、先ず幅広く上記の調査事項に関連する情報を収集・整理した後(一次調査)、調査項目の検討(絞込み)を行い詳細情報の収集と分析を行った(二次調査)。

②カリキュラムの開発

コンピテンシー教育を目的とし、コンピテンシーモデルの策定と教育プログラムの設計・制作を行った。コンピテンシーモデルとは、学生に修得させたい(指導上の目標となる)コンピテンシーの定義であるが、この策定にあたっては、本事業で実施した調査結果の他に昨年度の事業成果を含むこれまでの事業成果(各種の調査報告等)を参照することで、多面的な議論を行い、専門学校教育に適したモデルを明確化した。

教育プログラムの内容は、指導テーマごとのミニケース演習を基本要素として構成した。指導テーマとは、コンピテンシーモデルを構成する個々のコンピテンシー項目に対応した教育内容・方法である。演習の中では、各指導テーマの特性に応じた指導素材・題材を提示し、課題解決のためのツール(三角ロジックなどの論理的思考力等の基盤能力を練成する上で有用なツール)の授業での扱い方、講座の進め方などの実践方法等についての掘り下げを図った。

演習の進め方としては、ワークショップやロールプレイング等の研修スタイルを取り入れ、参加型の実施形態とすることによりスキル修得を図った。

また、ひとつひとつのミニケースは内容的に独立性・完結性の高いもの(互いに依存性や順序性を持たないような設計)とした。その狙いとしては、他の専門学校がこの教育プログラムを利用する場合、各ミニケースをモジュールとしておくことにより、各校がその時点で必要とする指導テーマ(ミニケース)のみを選んで実施することもできるような利便性を確保するためである。

③実証講座

本事業で開発した教育プログラムを用い、基本的に専門学校の教員を対象に、内容構成や指導アプローチの適切さや有用性、今後検討すべき事柄などに関する評価、検証を行った。今回開発した各指導テーマに対応するミニケース演習は3種類であるが、実証講座ではそのうちの1つである「論理的思考」に焦点を絞り、短期集中講座の形式で実施した。

・実施日時:平成19年3月7日(水) 午前10:00～午後4:00

・受講者:6名

教員5名(船橋情報ビジネス専門学校3名、神戸電子専門学校2名)／学生1名(船橋情報ビジネス専門学校)

・実施会場:アルカディア市ヶ谷 私学会館

・受講者の反応

実証講座終了後のアンケート集計結果などから推察すると、期待以上の成果を得ることができたと考える。

学生の論理的思考力の強化を狙いとしたケーススタディ演習の有効性については、受講者全員が、「非常に有効である」と回答し、その理由として、課題解決力、論理的思考力、議論などの重要性を挙げている。さらに、社会人基礎力やコンピテンシーに関する教育の意義についても、全員が「重要だと思う」と回答しており、本研修プログラムの有用性を高く評価していることを示している。

研修プログラムの内容面についても、論理的思考の手法としての三角ロジックの有効性、教育手法としてのケーススタディ、グループ討議の有効性、インターネットを利用した情報収集の有効性を問う質問のいずれにおいても、受講者全員が、「非常に有効である(だと思う)」あるいは「やや有効である(だと思う)」と答えており、研修プログラムの内容が肯定的に評価されていることを確認することができた。

また、質問の理由や自由意見には、「自分で調べ、行動する姿勢を身に付けさせることが大事であり、本ケーススタディはそのために有効であると思う」、「今回の研修は主張する機会が多く、会社に入ってから役立つ」など、他のコンピテンシーを身に付ける上でも役立つという本事業の目的とするコンピテンシーの重要性を認識し評価する意見も寄せられた。

④その他

コンピテンシー教育を行う上で大きな課題となるのが教員の問題—コンピテンシー教育の内容を把握し、それを実践できる人材の絶対数が非常に少ない—という問題である。これまでの専門学校では、職業教育の徹底という狙いから資格の取得や実務に役立つ知識・技能に関するHow-to型の教育を中心に据え、これを軸として教育の内容や指導の仕方、授業の組み立てなどの最適化を図ってきた。しかしながら、コンピテンシーのような一般性の高い能力の養成に対してHow-to中心のやり方では不十分である。

本事業では、このような現状への対応を目的として、コンピテンシー教育を効果的に実践するためのファカルティ開発を推進した。ここでは、専門学校教育(職業教育)に適したコンピテンシー教育の内容や指導方法等を探ると共に、教員研修体系の構築と実施を行った。